

第1回 地域こども・子育て懇談会 開催概要

1. 日時

令和8年8月5日（水）10:00～12:00

2. 場所

小田原市役所 7階大会議室

3. 参加者数

54人

4. 市長挨拶

地域こども・子育て懇談会は、小田原市総合計画第1期実行計画に位置付けた「協働プロジェクト」の一つとして実施する。

こどもたちが地域に支えられ、このまちを好きになって成長できる環境づくりは、小田原の未来にとって重要なテーマである。

地域には多様な支援や活動がある一方、「どこに行けば支援を受けられるのか分からない」家庭もあり、必要な人へ必要な情報を届ける仕組みが必要である。

子育て支援に関わる多様な人が一堂に会し、互いの活動や課題を知り、主体的につながることで、新たな活動やネットワークが生まれることが大切である。

今回を第一歩として、今後も懇談会を重ね、子育て支援の輪を地域全体へ広げていきたいと挨拶がありました。

5. アドバイザー事例紹介（NPO 法人未来経験プロジェクト 堤 園子さん）

平塚市での「平塚こども・子育て支援ネットワーク」の取組をもとに、支援者同士がつながることの大切さについてご紹介いただきました。

●事例紹介

平塚市では、こども食堂や学習支援、民生委員・児童委員、保育園・幼稚園、行政、社会福祉協議会など多様な主体が活動する一方、「他団体とのつながりがない」「必要な人に情報が届いているか分からない」「人材や情報発信に悩む」といった、支援する側の孤立が課題となっていた。

そこで、地域と行政が対等な立場で話し合うネットワークを立ち上げ、情報発信、地域交流、食材・寄付物資の共有、ボランティア育成、こども・保護者の声を集める活動などを参加者主体で進めている。

ネットワークを続ける中で、顔の見える関係が生まれ、新しい活動や協働が自然に生まれ、こどもや保護者の声が施策にも生かされるようになった。

「こどもの居場所は場所だけでなく、人とのつながりの中にもある」ことや、「行政がすべてやる」のではなく、自分にできること、誰かにお願いすること、一緒ならできる

ことを考えることの大切さが示されました。

最後に、地域で出会った子どもや家庭への気づきを一人で抱え込まず共有し、「まず集まり、話すこと」から始めてほしいとのメッセージがありました。

6. ワークショップ

事例紹介の後は、7つのグループに分かれてワークショップを行いました。アドバイザーから「課題から考えるのではなく、まず理想の未来を描き、そのために必要なことを考える」という投げかけがあり、参加者は「小田原の子育てがどのようなになったら、安心して子育てしたり、人を支えたりできるか」を起点に意見を出し合いました。

各自で理想の未来や実現に必要なことを書き出した後、グループ内で共有しました。さらに途中でメンバーを入れ替え、他グループの意見やアイデアに触れながら、自分の知識・経験・つながりを生かして「自分なら何を手伝えるか」「誰を紹介できるか」を考えました。最後に元のグループへ戻り、他グループで得た気づきを共有しました。

ワークショップで見えてきた主なテーマ

● 人と人とのつながり・孤立防止

子育て家庭だけでなく、支援する側も孤立することがあるため、日常的に相談・協力できる顔の見える関係やネットワークが必要との意見がありました。また、挨拶や会話、口コミなど、日常の小さな関わりの積み重ねが、地域での見守りや安心につながるという意見も多く出ました。

● 必要な人に届く情報発信

「情報がない」のではなく、「情報はあがるが届かない・探せない」という声が多く、居場所、イベント、相談先、制度などを利用者の視点で整理し、必要な人が必要なときに情報へたどり着ける仕組みが求められました。また、SNS やホームページだけでなく、口コミや人から人への紹介も、情報を届ける上で重要との意見がありました。

● 身近で安心できる居場所・遊び場

未就学児だけでなく、小学生を含む子どもが歩いて行ける範囲で自由に過ごせる場所、多世代が自然に交流できる公園や公共施設、猛暑時にも利用できる屋内空間などが求められました。また、「居場所」は単に施設や場所があることではなく、そこに知っている人や頼れる人がいることも大切という意見がありました。

● 支援につながりやすい環境

施設や制度があっても、移動手段、利用条件、心理的なハードルなどによって利用しに

くい場合があるため、支援を「用意する」だけでなく、必要な人が実際に利用しやすい環境をつくる必要があるとの意見がありました。また、「誰でもどうぞ」と発信するだけでは参加しづらい家庭もいることから、安心して参加できることまで伝える工夫も必要とされました。

● 誰もが参加できる地域

障がいや発達特性、年齢などにかかわらず、誰もが地域の活動や居場所に自然に参加できる環境が理想として挙げられました。そのためには、参加する側への支援だけでなく、地域の人や活動を受け入れる側が障がいやさまざまな特性について理解を深める機会も重要との意見がありました。

● 活動を持続するための担い手・仕組み

地域活動をボランティアの善意だけに依存するのではなく、人材育成、資金、保険、活動場所、担い手同士の連携など、活動する人が無理なく継続できる環境が必要との意見がありました。また、活動したい人と活動できる場所をつなぐことや、支援者自身が相談・協力できるネットワークの必要性も挙げられました。

● 小田原の地域資源を生かす

自然、農業、地域行事、お寺など、小田原ならではの地域資源や体験を生かし、こどもが地域のさまざまな人と関わりながら、地域への愛着や誇りを育むことへの期待が示されました。

● 人・活動・情報をつなぐ役割

地域にはすでにさまざまな活動や支援がある一方、それぞれが十分につながっていないという意見がありました。活動する人、手伝いたい人、参加したい人をつなぐとともに、それぞれが持つ情報や専門性を共有できる環境が必要であり、行政にも、人・活動・情報をつなぐ役割への期待が寄せられました。

7. グループ発表

各グループでは、意見交換の最後に「こんな未来のために、これがあつたらいい」という視点で、話し合いの中から代表する意見を一つ選び、全体で共有しました。

● 必要な情報が届く仕組み

人と人とがつながり、誰も孤立せず、地域で支え合えるまちを理想として、必要な情報を必要としている人に、必要なタイミングで届けられる仕組みが重要との意見が出ました。

●心地よい居場所と日常の挨拶

こどもや子育て家庭、高齢者、障がいのある人など、誰もが心地よく過ごせる居場所のある地域が大切との意見が出ました。そのためには人と人とのコミュニケーションや情報交換が必要であり、まず自分たちからこどもや近所の人に挨拶をすることが提案されました。

●子育て支援施設をつなぐ移動手段

子育て支援施設があっても、車がない人や妊婦、乳幼児連れの家庭にとっては移動自体が負担になるとの意見が出ました。マロニエや子育て支援センター、は一もにいなどを巡回し、妊婦や親子などが安心して利用できる無料の周遊バスがあるとよい、というアイデアが発表されました。

●分け隔てなく安心して暮らせる地域

障がいの有無や年齢などにかかわらず、誰もが分け隔てなく安心して暮らせる地域が理想との意見が出ました。そのために、学びや研修の機会、担い手の育成、人と人とのつながりを広げていくことが必要ではないかという話になりました。

●多世代が自然に交流できる身近な場

地域のさまざまな世代の人が自然に交流できる場があるとよいという意見が出ました。家から歩いて行ける身近な場所に公園やベンチなどがあることで、こどもから高齢者までが集まり、挨拶や会話が自然に生まれる地域になるとよい、という発表でした。

●こどもの遊びに理解のあるまち

こどもがのびのびと遊べる、こどもの遊びに理解のあるまちを理想として共有しました。その実現には、地域のネットワークづくりや情報共有・発信を進めるとともに、地域の大人一人ひとりが心にゆとりを持ち、豊かな気持ちで暮らせる環境も大切との意見が出ました。

●子育て情報の一元化

子育てに関する情報を一元化したポータルサイトを充実させ、居場所、イベント、支援制度などの情報を、必要としている人へ分かりやすく届けられる仕組みをつくることが発表されました。

8. 全体を通じたまとめ

今回の懇談会では、子育て支援や地域活動に関わるさまざまな立場の参加者が、それぞれの活動や経験を持ち寄り、「小田原の子育てがどのようになったら、安心して子育てしたり、人を支えたりできるか」という理想の未来から意見を交わしました。

話し合われた内容は、情報発信、居場所や遊び場、移動手段、障がいや発達特性への理解、活動の担い手など多岐にわたりましたが、全体を通じて、「人と人がつながり、誰も孤立せず、地域全体でこどもや子育て家庭を支えていくこと」の大切さが共有されました。

また、地域にはすでに子育て支援センター、こども食堂、地域の居場所、相談支援、農業体験など、さまざまな活動や資源がある一方で、それらが十分に知られていなかったり、活動する人同士がつながっていなかったりすることも見えてきました。新しい取組を増やすだけでなく、今ある人・活動・場所・情報をつなぎ、それぞれの力を生かしていくことも重要であるとの気づきがありました。

特に、情報については「発信しているか」ではなく、必要としている人に実際に届き、利用や参加につながっているかという視点が多くのグループで共通していました。また、居場所についても、単に場所を用意するだけではなく、知っている人や頼れる人がいて、安心して参加できる関係性をつくることが大切との意見がありました。

さらに、子育て家庭を支える人や活動団体自身も、担い手不足や活動資金、情報発信、他団体との連携などの課題を抱えており、支える人も孤立せず、互いに相談し、助け合える関係をつくることの必要性も共有されました。

今回の懇談会を通じて、地域のさまざまな主体が互いの活動や課題を知り、それぞれが持つ経験や専門性、つながりを共有することが、新たな連携や活動につながる可能性が見えてきました。